

広島県立美術館

研究紀要

第13号

- 『改正香道秘伝』(下巻)の翻刻(その二) …………… 石橋 健太郎 1
- 資料紹介：南薫造「1909年日記」と「滞欧期ノート」 …………… 藤崎 綾 30(15)
- 中央アジア・トルクメン人エルサリ族のジュドゥルについて …………… 福田 浩子 44(1)
- 広島県立美術館所蔵刺繍袋コレクションに見るアーモンド(バダム)文様—

2010

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.13

- On *Judur* of Ersari Turkmen, Central Asia: the almond (*badam*) pattern (1) 44
from the embroidery bag collection of Hiroshima Prefectural Art Museum, Hiroshima Japan
FUKUDA SIDDIQI, Hiroko
- A Study abroad diary and related materials of Minami Kunzo (15) 30
FUJISAKI, Aya
- A Reprinting of the mysteries book of the incense ceremony Vol.2-Part2 1
“Kohdohhidensho-Kousei-Makinoge”
ISHIBASHI, Kentaro

2010

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

資料紹介：南薫造「1909年日記」と「滞欧期ノート」

藤崎 綾

はじめに

広島県立美術館では、南薫造（1883・明治16－1950・昭和25）に関わる資料を、御遺族に御協力を賜り調査している。筆者はここ数年、画業の展開上、注目すべき時代を中心に日記原文を公表してきたが、本稿では、留学時代（1907・明治40－1910・明治43）の活動を記した二件の資料（資料1・2）を紹介したい。滞欧時代については『倫敦の日記』を抄録した既刊の日記があるが¹、資料1は、近年新たに提供いただいた1909年の日記帳であり、前述の日記の空白期を埋める記述を含んでいる²。表紙に「POCKET DIARY」とあるように、縦10.2cm×横7.2cmと形状は極めて小型で、1週間が見開き1ページに収まる仕様となっている。記述は1月1日から始まり、二度目のパリ訪問のため大澤三之助³とロンドンを発つ7月7日までの約半年間の生活を記す。この間の動向としては、後述するチェルシー・キングスロードの画室兼下宿（図1・2）からトテナムへの転居⁴、白瀧幾之助⁵、富本憲吉⁶とともに滞在、美しい景観や宿の家族との交流が作品を通じて今に伝わるウィンザー旅行（図4）⁷などが知られていたが、モデルを使った制作や学校の授業への出席を示す記述等により、不明だった時期の制作活動の一部が明らかになった。同様に、日本人美術家を中心とする交友関係についても、より詳細な情報が得られる。前年にロンドンやパリで交友を深めた大澤、白瀧、高村光太郎⁸（図3）、着英直後から交友のあった石橋和訓⁹らの名前が登場するほか、稲田三之助¹⁰、大澤、佐藤功一¹¹、瀬本作次郎¹²、富本、日高胖¹³らをはじめ、南の帰国後にもわたって多くの日本人が集まり、「槽花街」「華須花楼」などの当て字で親しまれ、交流の場となったシェファード夫人の下宿・カスカート（26 Cathcart Rd, South Kensington）訪問も記されている。また、記述が正確ではないものの、和訓の画室で南がモデルを務めた可能性のある記述も見られ興味深い。

資料2は、縦20.0cm×横16.4cm、紙数84ページの横罫のノートで、1908年2月7日、1908年7月、1909年2月9日の記述があることから、留学中の使用が確認できる。キングスロードの画室の紹介、自身の近況、作家・作品評、東西文化の比較論等が、日本の友人に宛てた書簡やレポートなどの形式をとりつつ、72ページにわたって記される。なかでもバーン＝ジョーンズやロダンについての言及、学校で描いたモデルの説明、画室についての詳細な報告は、制作活動を理解する上で示唆に富む。ロダン関連の記述は、論文からの抜粋で私見は含まれないものの、その芸術を評価する批評をあえて書き留めた事実から、ロダンに対する関心や理解を読みとることができよう。この記述は、同年秋のパリや、翌年冬のヴェネチアでの作品実見、ローマで見たミケランジェロ作品との比較等、『倫敦の日記』中のロダン言及に先立ち、この彫刻家について記した最初の記述と考えられる。後に『白樺』ロダン号の表紙絵を描く南だが、ロダンへの関心と呼び覚ます一つの契機として、早くからその強い影響を受けた高村光太郎との滞欧時代の交友やその深まりがあったことは疑いのないことと思われる。

一方、絵画においては、「妙を極め」た「布極」、「調和の内にある」色彩、「神秘的な感」を備えた、バーン＝ジョーンズの《水車》をきわめて高く評価。留学中、絵画や彫刻をはじめ多数の作品を鉛筆や水彩で模写する一方、油彩で本格的に制作したと伝わるのは、ミレーの小品を除けば、バーン＝ジョーンズの《水車》、《夫の無事の帰還を願うブルターニュのドリゲン》のみであることも¹⁴、彼に対する関心の高さを裏付ける。サウス・ウェスタン・ポリテクニク（現・チェルシー美術学校）で昼・夜二つの人物画のクラスを受講、人体表現を学んでいたことから、修学の成果を試すことも模写制作の理由の一つであったかもしれない。1908年2月7日付の記述には、同校で「肩と胸部を出して白絹の着物を着け濃緑の中のパックの前に坐」る女性のモデルを20号で制作中であり、これに先立って「スコットランドのお爺さんで眞赤な縞の肩かけへ眞白い長いひげをたらしレンブラントの様なり光の内へ坐って居た」「よいモデル」を描いたことも述べており、それぞれ《西洋婦人(A)》（口絵8）と《スコットランド老人》（口絵7）の制作を示唆している。《水車》の魅力として挙げた構図の妙や色彩の調和は、これらの作画のうちにも追求されていると考えることもできるだろう。

最後に、制作現場の記述について言及しておきたい。「画室訪問」で始まる一文では、自身が住んだオンスロー画室（Onslow studios, 183 King's Road, Chelsea）¹⁵に焦点を当て、近隣の情景から建物の外観やその内部、住人の美術家や通ってくるモデルの生活までも生き生きと描写している。冷静かつ細やかな視線の先からは、ロンドンの美術家事情が臨場感とともに共感をもって伝えられる。同画室で交友を深めた大澤、白瀧、高村らと帰国後も集まって開いた「オンスロー会」の存在や、郷里・安浦のアトリエに付けた「恩須樓」¹⁶という愛称などは、世界最大の都市・ロンドンに集った、さまざまな国の美術家が、「一つの屋根の下」制作に励む「寄宿舍」への愛着の程をよく示すものだろう。

同資料中には、ヨーロッパ絵画と比較した日本絵画の特性、美術と音楽との対比など、他にも芸術論が散見されるが、紙数の制限もあることから、制作活動を理解する助けとなり、特に資料1と関連する記述に焦点を当てて紹介することとした。なお、割愛した内容の多くは、後に刊行する自著『画室にて』（1915年 趣味叢書発行所）に類似の文章が掲載されていることを補足しておきたい¹⁷。

以下、原文を紹介するが、他者への否定的・差別的表現等も見られるものの、資料性に鑑みそのまま掲載することとした。なお、内容を補完するため、作品とともに、当時使用したスケッチブックや葉書等の関連資料の一部を口絵及び末尾に掲載した。

資料1 1909年日記

本文中の□は判読不能の文字を、□内の文字は、判読の可能性のある文字を示す。一部に誤字・脱字も含まれるが、明らかな誤りを除き原則として原文のまま掲載した。末尾で紹介した図版のうち、画中に書き込みがある場合は図版の下段に「」で記した。

日付 (曜日)	日記原文
(欄外)	Onslow studios 183. King's Road Chelsea, Londonに住む
1月1日 (金)	藤村氏 ¹⁸ 宅に白瀧君と行く。
1月2日 (土)	夕方から多勢のお客 大沢、稲田、日高、金澤 ¹⁹ 、石橋、メリヒフルド ²⁰ 。
1月3日 (日)	田中 ²¹ 、林氏 ²² を携へてPutney ²³ へ行く。
1月4日 (月)	夜 Cathcartを訪ふ。
1月6日 (水)	Grafton Galleries United Arts Club.
1月9日 (土)	下宿屋。武内君 ²⁴
1月10日 (日)	Mr □ half past 7.
1月11日 (月)	Evening Class.
1月13日 (水)	正金銀行。二百円受取。十三日。岡田 プリチッシュミュージューゼム。希臘ベース
1月14日 (木)	プリチッシュミュージューゼム。希臘ヴェース。
1月15日 (金)	サウスケンシントンミュージヤム。The Mill. 演説。夜Y.M.C.A.
1月16日 (土)	夜メリーウイドー。渡辺君 ²⁵
1月19日 (火)	Royal Academy Winter exhibition.
1月20日 (水)	20. at. 8. Queen's Hall 216 □ 320. □ st. SW Kreisler's Violin
1月21日 (木)	Leeds Exhibitions へ出品日 10am 6pm
1月22日 (金)	全上。
2月3日 (水)	Queens hall. 3 o'clock.
2月6日 (土)	本多君 ²⁶ 出発。神奈川丸 十二時頃。
2月10日 (水)	午後三時頃 平野丸 ²⁷ 入港 富本君来
2月11日 (木)	モデル。10.30-1.30
2月15日 (月)	10.30-1.30. モデル。トテナム。
2月17日 (水)	Putney. half past 6.
2月18日 (木)	10.30-1.30. model.
2月23日 (火)	10.30-1.30. oldman model.
3月11日 (木)	ドック。
3月13日 (土)	3 o'clock 洋服屋。
3月20日 (土)	a.m.10. モデル、ethel ²⁸ .
3月21日 (日)	2 o'clock. (Bertha). Albert Hall
3月22日 (月)	石橋君の画室にてホーズ。
3月26日 (金)	Water Color for RA
3月27日 (土)	For R.A exh Oil Painting.
3月29日 (月)	Oil Color. for RA

3月31日(水)	ウィンザーに行く。King's Arms Hotel Thames side, Windsorに宿 ²⁹
4月1日(木)	白瀧君倫敦に帰る。
4月2日(金)	宿の子供は五人。ボーイ二人 ガール三人 Rosy. Marrie. Frank.
4月3日(土)	白瀧君、富本君と再び来る。
4月4日(日)	此頃 毎日面白イ 夕 河上に散歩す。月キレイ。
4月5日(月)	河は青く月がキレイだ。
4月6日(火)	カッスルを水彩で初める。夕、淡くキレイ。マリーが来てスワッテ居る
4月7日(水)	夕方カッスルの水絵に行く
4月28日(水)	バーミンガムに立つ。
4月29日(木)	全所滞在。
4月30日(金)	Stratford on Avon ³⁰ に行く
5月1日(土)	バーミンガム。
5月2日(日)	Chesterに行く 夜リバプール着。
5月3日(月)	朝、博物館 美術館を見 みる ロンドンに立つ。
5月15日(土)	午後四時過ぎ □より 高村君たつ あわ丸
6月19日(土)	12-12.30 <u>Kadoma.</u> □
6月23日(水)	Lizars "Challenge" opportunity Dayspool. Lizars Beck Symmetri and lense. (£2.6.) High Holborn 251. W.C.
7月7日(水)	巴里へ立つ 大澤先生と共に

資料2 滞欧期ノート

画室訪問。

ロンドンの西南区にキングスロードと云ふのがある。何んとかと云ふ寄席の前を少し過ぎるとイーゼルの古物や額縁や、其れから絵具や筆等を列べて居る店が沢山ある。中にはガラスまで木製の人間のモデルや馬のモデルを列べて居る。此等の店の一つと豚の塩つけを賣って居る店との間に幅半間位の入口があってトンネルの様に向ふの方へ引き込み入口の前に黒塗の板へオンスロースチュディオスと書いてあるのが古くなってからうじて讀みとられる。三四段石段を上って戸口に入ると暗い壁に條の引っぱった黒板が掛けてあって何番には誰が居ると名が書いてある。二十番ばかりある。画室(と云っても画室だけでは無い彫刻の室もある)が二十種寄宿舍の様に一つの屋根の下にあるのである。此の名前を見ると中々面白い。普通の英国人の名の下には音の奇妙な伊太利人が二人併んで居たり、獨逸人の固苦し名前も見へる。何んにも書いて無い所は今まあき間であらう。暗いローカを行くと両

側の戸に名刺程なガラスがはめてあって其れに室の番号と名前が記してある。梯子段を上って一番□
 みの画室に入った。此所には或る若き海景画家と其の友人が二人で住んで居る。光りは西北で画家の
 間にスローン（王座）と称して居るモデル台が壁に沿ふて置いてあり横には雑誌やカタログや素画等
 が足も踏みしめ無い程ちらばって居る。不風流極まるキャンバス製の二枚折屏風の向側には、あまり温
 かそうにも無い寝台が二ツ列べてあり其の又た横には瓦斯の七輪がブリキの薬罐をのせて□る。コ
 □ヒ一茶碗や皿がコロがって居る。□の下には嘗て展覧会へ出したものか金の縁の帆まへ船や貧民
 が瓦斯燈の下で□って居る絵等がたてかけてある。此の画室と云ふのは勿論人に貸す為めに建てあ
 るので入口の傍にはキーパー一家族の室があって之れが画室の掃除や何やかをする。で画室の間代は
 いくら位かと云ふと最下等が凡そ一年二百五十円位で五六百円までである。まだ立派な所へ行けば千円
 を越ゆるのもあるそうだ。三階の室を出て二階の一室に入った 此には彫刻家³¹が居る。此の人はウキ
 ッスラーの二番目の婦人の子である。つまりウキッスラーは此の人の為めに義父にあたる。先づ室に
 入ると壁に日本の木板絵が四五枚額にしてかけてある。豊國等中々よいのがある。自分の造った彫刻
 を台を廻し乍ら見せて呉れる。今まサイ□の裸体像の小さなのを造りつゝある。向ふの方の棚には□
 □した石膏や粘土のまゝのが列べてある 話をして居る最中に戸をたゝくものがある。女だ。モデル
 の入用は無いかと云ふ。此の室は之れ位にして又た他のを御紹介しよう。此の画室から余り遠くない
 所に入口の門の上へ彫刻の群像を置いて一寸何か知らんと思われる家がある。僕を引っぱって行て呉
 れる口君³²は茲は前のより少し金の有る者が住んで居るのだとさゝやき乍ら這入る。暫時ろ一かをま
 っ直ぐに行て小さな庭の所へ出るとまるで田舎のコテージ風に建てゝある画室がある。其の戸を
 たゝいて内に入った。茲にはP君と云ふ圖案家が住んで居る。之れでまだお嫁さんの無い若い技術家
 だ。此の人は圖案家と云つても模様の様なものばかり書いて居る。実にキレイな細かい事やう
 居る。其れで室中絵だらけで椅子や戸棚は勿論、（※原文がここで終了—筆者註）

ヴィクトーリア、アルバートミュージウム。（サウスケンジントンミュージウム）。

ギャラリーの一室に近き頃□に開かれたるイオニスコレクショント云うのがある。これは小さきコ
 レクションではあるけれども其の内には立派な作品が多くある。英吉利画家では、ロゼッチ。バー
 ジョンス。ゲンスボロー ワッツ。アルマタデマ。獨逸派ではレンブラント。佛蘭西では、ミレ。コ
 ロー。ルーソー。クールベ。デガス。ドラクロア。アングル。伊太利では古きものでは十五世紀頃の
 作及びRossetti. Summer dream

〃 2 drawings

Barn Jones. The Mill.

〃 〃 and drawings.

Rembrant. 自画像。

騾□に騎せる婦人。

Millet. 木をひける人。

羊飼ひの女。

風景。

水彩画小品三点。

及び戸口より下れる女。

Corot 風景二。

ルーソー。 風景スケッチ。

Coulbet. 海。

ドラクロア。難破船。

デガス。 舞踏。

アングル 裸体女。

ロゼッチの夏の夢は彼の作の内でも名有なもの、一つである。が一見すると其の色がきたなく且つ固く見える。然し乍ら其の気品は実に高いもので、彼は之れを「念願」に置いて色や他の技巧は捨て、其の顧り見なかつたらしい。此の絵の隣りにゲンスボローの小風景画を於いてバンジョーンスの“水車”の絵がかって居る。此の水車の絵は彼の作品中傑作と見える。バンジョーンスには一種の癖があるのは誰れも知って居る。此の絵は其の癖のむしろ最も少ないものであらう。布局は妙を極めて背景は実に神秘である。全体の色は強き、暗き、大緒色の調和の内に在る。舞える三人の女の内にて、眞中に立てるものは最も気高き美しさを示し、顔、頸等のアウトラインに沿ひ、また着たる衣に於て何んとも形容す可からざる色彩、も一膜の迷ひの如き色彩を放って居る。音無く流れる水の向ふ側にたてる古城に似たる水車小屋も水辺に繁れる濃き緑りの草も共に重き氣の内に沈んで此の繪の前に立つと一種「異」様な神秘的な感が湧いて来る。凡てが静ジャクの内にも有って舞える女の絹の衣のすれ合ふ音が時にかすかに聞えんとして居る。

四十一年二月七日

□□領事館へ要事があって行き其の帰途ついでだからと思ふてポートレートギャラリーへ寄って見た。ナショナルギャラリーへは屢々来たが同じ建物のコノポートレートギャラリーへは初めて這入□見た。ポートレートと云ふと何んだがチャームされる事が少なく余り見に行く気もしなかつた。来て見て実にかっかりしてしまったよ。此のギャラリーは絵の爲めにあらずして肖像の主人公、キング「た」れそれ、クイン、公爵、將軍と云つた様なわけで実に面白くない。それに絵もまことにつまらない。レーノールズの駝作が数十枚ある 或は何百枚かも知れない。ナショナルギャラリーにあるレーノールズの絵は中々立派なものだが、こゝにあるのはどれも之れも下らない。イ、加減なものばかり。ゲンスボローも数枚あるが嫌なもの、其の他似た様なものが一パイ、ズラッと懸けてあるが殆んど見る価値は無い。只だ手先きでペラく画いたのばかり。中にワッツの肖像画が十数枚もあるが之れが一番よい。ホントーが描いてある。其の内にも所謂ワッツ風のが四五枚あるが之れをのぞいて眞面目に描いたものは非常によい。ワッツは其の作の内肖像画が一番よかったかも知れない。彼れの製作せる絵は、例の風が余り有り過ぎて嫌である。ワッツの若い時代の自画像がテートギャラリーにあるが実に穏やかな傑作である。僕は思ふね、どんなに立派なつも「り」の絵でも自然をはなれたものは

何の価値もない。僕の云ふ此の自然を離れぬと云ふのは此頃文学家等が八釜敷云って居る自然主義とは異って居る。文学家の云ふ自然主義はどーもリヤリストティックの事らしい。僕はリヤリストティックの事を云ふのでは無い 僕の自然と云ふのはインプレシヨンの事だ。インプレシヨンを以て画いた絵で無ければだめだ。インプレシヨンを以て描いたもので無ければ零であると僕は思ふ。インプレシヨニズムは必ずしもモネやシスレーのポチポチの技巧を云ふのでは無い。印象を云ふので此の点から云へばターナーもフキツスラーもミレもコロもロゼッチも大インプレシヨニストである。レンブラントもベラスケスも非常なインプレシヨンを以て絵を画いたに相違無い。ミレイスの絵はどれもこれもお芝居をして居る。画へ過ぎた、インプレシヨン無しに描き上げた。見るのに同情を催さない。味ふ可き面白味が余り多く含まれて居らん。技巧に於ては大したものである。其の絵の一局部をとってよく見たなら実に精巧なものであるが動いて居ない。器用過ぎたのであろうか。で肖像の方がよい。只だ彼の作でオフヘリヤは立派なもので明らかにプレラファイライトの特色がある。盲の女の子と云ふ絵も立派であらうと思つて居るが今ま倫敦から出て居るから見る機会をまだ得ない。英国の彫刻は□□つまらない。之れもエキスペシヨンの缺乏に原因する。レイトンの蛇をつかんで居る彫刻は筋肉がゴブく造つてあるにもかゝらず少しの活動の感しか無い。此の彫刻のスケッチ（粘土で造つて高さ五六寸しか無い）の方が数倍まさつて居る。レイトンの絵もさうである。レイトンのスタディーは実に立派だ（君も美術学校の文庫で見たであらう）驚く可く愉快だ。しかし出来上つた絵はさう程面白味が無い。一体に英国のローヤルアカデミーと云ふものは余り感心は出来ない。余りアカデミー風で教育家風である。死んだ絵が出来る。も少し生きくした風が欲しい。先日アルフレヰイースト氏の画室を訪問した所が先生はローヤルアカデミシヤンのアシスタントであるにも係らず非常にアカデミックが嫌いで其のコーゲキの気焰は中々盛んだつた。話しが飛んでしまつたが再びポートギャラリーの中を大概どれも同じだからいゝ加減に飛ばしく見て行くとバンダイクが数枚ある。これもつまらない。僕はバンダイクと云ふ人の絵は非常に立派なものであらうと此地へ無い迄は思つて居たが豫想外だつた。寫眞で見た方が余程よい。イヤダくと思ひ乍ら一應ズツ廻つて外へ出た。其れから或る公園へ這入つて池の傍へ来たたら、小供が橋の上から何百と集まつて飛んだり泳いだりして居る鷗へパンをなげてやつて居る。ウソを画いた絵よりも此の方がどれだけキレイな知れない。小供にも鷗にもチットモウソが無い。学校へ昨日から実に立派な女のモデルが来た。何んとも云へない高尚な表情で肩と胸部を出して白絹の着物を着け濃緑の巾のバックの前に坐つて居る。白、黄、淡きバラ色の調和は何んとも云われない。二十号程のキャンバスへはじめた。此の前はスコットランドのお爺さんで眞赤な縞の肩かけへ眞白い長いひげをたらしレンブラントの様なり光の内へ坐つて居た。之れもよいモデルだつた。君か居ればと思つたよ。学校の内でも来週から小さい展覽会が開かれる。絵は三十枚程で教授ジョンソン氏の絵が数枚 氏の夫人のパステル画（夫人も立派な女流画家である。十二月頃のステュディオに夫人のパステルがのつて居た。貧乏人の女が眠つた子供をだいて居る絵。君は見ただろー）、氏の友人及び学生二人のコンポジション等で僕の水彩画を一枚出せと云われたから先日ロンドンの町はづれで画いたのを出す事にした³³。（僕の這入つた学校はサウスウエストポリテクニクカレッジと云ふのである。政府の学校であるから何にかにつけてよい）。当地は勉強は余程よく出来

る。之れで金さへ思う様にあれば云ふ事は無いが左様うまくは行かぬ。金が無いところがよいのかも知れん。此所では金はイクラあっても到底たらぬ。であるから僕は大きいに超然として居る。日本製の洋服で（しかも夏服だ）かつ歩して居る。先日或る日本人から少しズボンでも折目をつけ茶色の外套もやめて新しいのを拵へたら宜からうと忠告されたが、そんな事をかまわして居ては生きては居られん。下らん事を長々と書いた。読んで呉れ給へ 君からも時々度々遣こして呉れ給へ。日本から本当の趣味のある話を聞くのは君より外には無い。猪飼君³⁴に手紙を出すなら僕も呉々よろしく云って居たと云って呉れ給へ。サヨナラ。

バーンジョンス。

バーンジョンスは、一千八百三十三年の夏にバーミンガムの町に生れた。小供の時には別に天才的の萌芽とも云ふ可きものも現はれず且つ藝術的な遺傳も承継いだとも思われぬ 至って平凡に少年時代を過ごしたものと見える。只だ物に固着する力忍耐力、時としてはがんことも思われる程な忍耐力、及び熱烈な感情は父祖より傳へられた血の力であったであらう。其れであるから彼の一枚の絵を畫くには驚く可き永い時日を費して居る。が必ずしも一枚の絵を毎日く畫いて居たのでは無く数個の未成のカンバスが常に其の畫室にあったに相違ない。其れで感興の湧かない時には決して筆をとらなかつた。で自分の絵を常に並べて比較し本当に自分で自分の絵を味ひ乍らコツクブラシ□を運ばした。一生涯の内に嘗て一度も展覧会の為め態々絵を製作しなかつた。其れで若し出来上った絵があつた場合には展覧会に出し、無かつた場合には無論出さない、と云ふ様に悠々たる心持ちであつた。故に絵の日付けと其の絵の出品された展覧会の時とが非常に異つて居るのが少なくない。今ま其の絵が如何に永い間畫家の手の下に扱はれて居たかを例を擧げて見れば次の様である。最も有名なる絵の一つの金の階段は一八七二年に圖案され一八七十六年に初められ一八八〇年に出来上る。運命の車。一八七一（圖案）一八七七……一八八三（未成）。マリヤ受胎。一八七六……一八七九。ヘレウスの興一八七二……一八八一。バースオブヴェナス一八七三……一八八八未成。大概短かいのが三四年で永いになると十数年もかゝつて居る。「水車」は一八七〇に初められて一八八二年に出来上った。実に十二年間を要し一度出来上った上をまっさつされ再び画かれまた消され復た初められると云ふ様に実に氣長く着手されたものと見えて絵の表面に色々底に画かれたる脊景 前景の草、木、また衣服のひだ等が、かすかに頭われて居る。斯くの如く其の製作に甚だ永い時間を要した如く其の人物も到つて晩成の人であつた事は明白である。かくして物質的の十九世期を禪□深かき古き世の美を以て飾□て一八 年に 於て遂に此の世を去り 彼が実に屢々画き常に其の頭に宿りたるおもかげの、既に久しき間親しかりし天使等の群れに往つた。馬車馳せ自動車輾るは騒がしいけれ□倫敦の町のひゞきも彼の製作せ³⁵るステインドグラスをへだてたる寺の内は側は寂然として居る。

萬仁³⁵が話すに

君は何れかのスクールに属せなければならぬ。決して只だ一本立ちにやつて行けるものではない。總ての美術は明らかに或るスクールに附属し或る者の感化を受けて居る。ラファエル前派は全く新らし

く出来たものと思ふか。決して左様思ひはしないだろー。完全なる美を造り上げるには矢張り古人が既にやって居る美の多くを含まなければならない。モネの印象派の如きも一方から云ふと実際眞実である。光りの実がある。光りの美がある。此の派は実に新しいもので殆んど一本立の如き観がある。然しながら、此の派は決して完全な美を造り上げては居らぬ。光りの美はあっても線の美が無い構図の美が無い。此派のやり方は自然の研究の一法として非常に大切な事は疑ふ事は出来ないがだ、自然の研究だけである。自然の或る部分の研究である。決して全きものでは無い。で要するに全く飛びはなれて何んの感化も受けない全く新しいもので完全な美術を構製する事は望まれないと云ふのが僕の説だ。何にかのスクールに属してソシテ其のスクールの一番エライものになったのが実際の立派な美術家だろーと思ふ。

Symonsの著“Studies in seven arts”内のRodinの場所で此様な事が書いてある。ロダンの美術は他の彫刻家の作よりもズット自然を以て完成せられてある。他の彫刻家が「生命」を彫刻物に拵へ上げんとせる時に彼は彫刻を「生命」に造り上げんとして居る。自然を離れて美無し。彼の作は自然より直ちに、少しも飾る事無しに、とられて居る。然し之れは自然の模寫に非らずして自然の再創である。ロダンには美とは生命にして生命は自然である。物の美なるは生なるが為めである 従って総ての物(自然の物)は美である。同じ程度の美を持って居る。若し総ての物を其れ自身の特有の位置に置いて見れば一物が他のよりも尚ほ一層美であると云ふ事は出来ない。彼がモデルを使ふに、其のモデルが彼の気に入らない時、モデルに就いて失望した時でも彼は矢張り仕事を続けて行く。そしてモデルを決してポーズにつかす事は無い 彼は仕事をつづけてやって居る間に其のモデルの美しき瞬間を見出す。其のモデルに特有の美を見出す。凡ての物は其れ自身特有の美を存して居る。四一年七月チェルシー図書館にて

【註】

- 1 岡本隆寛・高木茂登「倫敦日記抄」『南薫造日記・関連書簡の研究』1988年。冒頭に「倫敦の日記」と記され、1907年9月21日のロンドン上陸から1910年4月9日の郷里・内海着までを記した1冊の日記帳の抄録である。
- 2 『倫敦の日記』には、1908年10月23日から1909年3月30日までの記述がない。なお、資料1の見返し裏には、「To Minami」との宛名とともに、「Borough Johnson. Richmond. Dec 25./08.」と読めなくもない記述があり、この日記帳が、サウスウェスタン・ポリテクニックで南を指導し、交友もあった画家・アーネスト・ボロー・ジョンソン(1867-1949 当時リッチモンドに在住)から前年末に南に贈られた可能性もある。
- 3 大澤三之助(1867-1945)。東京都出身。帝国大学工科大学造家学科に学び東京美術学校講師を経て1907年1月公費留学。1910年10月帰国。略歴については、註8・10・11・13・21とともに、手塚晃・国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房 1992年)を参照した。
- 4 7 Bruce Grove Tottenham, London. 1909年4月17日より同年7月7日まで、及び1910年1・2月に居住
- 5 白瀧幾之助(1873-1960)。兵庫県出身。東京美術学校に学び1904年渡米、1906年渡英。翌年パリに学び1908年再帰英。1910年帰国
- 6 富本憲吉(1886-1963)。奈良県出身。東京美術学校に学び1908年イギリスに私費留学。1910年帰国
- 7 1909年3月31日ー4月13日滞在。図4は、宿泊先(キングス・アームス・ホテル)の娘・マリー(当時6歳)を描く(画中に名前を書き込みがある)。また、姉・ロージーを描いた作品が、ふくやま美術館に収蔵されている。

- 8 高村光太郎 (1883-1956)。東京都出身。東京美術学校に学び1906年2月渡航、1909年6月帰国
- 9 石橋和訓 (1876-1928)。島根県出身。1903年渡英。ロイヤル・アカデミーに出品、肖像画家として知られる。1918年帰国するも、1920年再渡英
- 10 稲田三之助 (1876-1952)。名古屋市出身。東京帝国大学工科大学電気工学科に学び通信省を経て1908年5月に公費留学。1910年12月帰国
- 11 佐藤功一 (1878-1941)。栃木県出身。東京帝国大学工科大学建築学科に学び三重県技師を経て1909年4月に私費留学。1910年8月帰国
- 12 瀬本作次郎。当時カスカートに居住
- 13 日高胖 (1875-1952)。東京都出身。東京帝国大学工科大学建築学科に学び住友本店臨時建築部より、1908年7月私費留学。1909年7月帰国
- 14 ミレーの《牧羊女》(資料2中のイオニスコレクションの《羊飼ひの女》を指すか)を模写したとの南自身の記述はあるが、作品の現存は確認できない。《水車》の模写は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館(1907年 油彩・キャンバス 92.5×198.7cm)、郡山市立美術館(1908年 油彩・キャンバス 70.3×153.8cm)が、《夫の無事の帰還を願うブルターニュのドリゲン》の模写(1909年 油彩・キャンバス 27.5×37.8cm)は、神奈川県立近代美術館が所蔵。原画はいずれもヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の所蔵品である。
- 15 チェルシー公立図書館所蔵の1908-09年における選挙人登録簿によると、「183 King's Road」には画室がNo.17まで確認でき、9人の有権者登録がある。多くは画室兼住居として利用されているが、画室のみの利用者もある。同資料には南の名前はなく、南が住んだNo.11には、両年とも友人・エドワード・ゴドウィンの名前が記載されている。ゴドウィンはNo.11だけでなく、連続した他室も使用していることから、彼の部屋の一部を南が借りていた可能性がある。
- 16 吉井章五『思ひ出の記』(私家版)
- 17 同書掲載の「日本の繪、西洋の繪」「デコラティブ」「壊れた煉瓦壁」の草稿と思われる文章が資料2に確認できる。
- 18 1909年秋頃の南薫造宛、白瀧幾之助書簡に藤村氏及び同夫人の言及があり、白瀧は夫人の肖像画を描いた可能性がある。：高木茂登「白瀧幾之助の南薫造宛書簡について」『広島県立美術館研究紀要』1号(1994年3月)pp.6-7
- 19 名前不詳。「c/o Acton Village Nantwich」在住「H Kanazawa」による1909年2月27日付の南宛書簡がある。
- 20 レナード・スタンフォード・メリフィールド(1880-1943)。彫刻家。石橋和訓と同じスタンフォード・スタジオで和訓の隣室に住む。
- 21 田中不二(1877-1922)。東京都出身。東京帝国大学工科大学機械工学科に学び同大学講師を経て1908年6月公費留学、1911年3月帰国
- 22 林幸平(1880-1934)か。
- 23 『倫敦の日記』末尾には、「武内君 Putney, S.W. London」との記述がある。
- 24 武内鶴之助(1881-1948)か。1910年7月にウィンザーを訪れ、前年に南等が滞在したホテルに宿泊した三宅克己は、同地訪問は「竹内君」の紹介によること、及び前日に「ギングスロード」の彼の画室を訪ねたことなど、武内との交友を南に報せており、南と武内とが既知であることが想定できる(図5参照)。なお、「竹内君」については、図5と同日付けの三宅の文章が掲載された「欧州通信」(『美術新報』9巻12号 1910年10月 pp.12-14)に、「竹内鶴之助」と記されていることから、武内鶴之助を指すことがわかる。
- 25 渡辺憲治(もしくは賢二)か。渡辺憲治は、1908年7月頃、イギリス北部への旅行に南と同行したと考えられる。
- 26 パリでアカデミー・ジュリアンに通い絵画を学んだ後、ロンドンで印刷技術を学んだ本多功か。
- 27 斎藤文也との交友を指すか。斎藤は、南が渡欧時に乗船した博多丸の船員で、着英後も交友を続けていた。1909年秋頃には、平野丸の船員だったと考えられる。
- 28 『倫敦の日記』には、「少女。十一才位円顔 Miss Ethel Harwood」としてウェスト・ケンジントンの住所が記載されている。なお、当時のスケッチブックには、彼女が描いた自画像と南を描いたと思われる人物素描がある。
- 29 三宅克己によると、「宿屋はステーションを出て直ぐ近くのテムズ河畔。向河岸がイートンの町」である。また、「近日竹内君や高木誠一君も寫生に來られるといふことだが、此質朴なる宿の二階で又面白い日本畫家の集會が出来るであらうと、今から楽しみにして待つてゐる」と、同地と日本人画家との縁も記している。：前掲「欧州通信」
- 30 滞在日について資料1とは齟齬のある記述が当時のスケッチブックにある：「四十二年五月一日。今日パーミンガムよりストラッドフォードオンエボンにサーキスピヤーの家を訪ふ。路の辺りにメイの花白ろくふゞきの如く咲けり」。
- 31 エドワード・ゴドウィン
- 32 グレゴリー・ロビンソン。オンスロー画室に住んでいたことのある画家
- 33 1908年2月17日-3月14日開催。37点の作品が展示された。南の出品作は《Barnes Common》
- 34 猪飼俊二。東京美術学校西洋画科における南の同級生
- 35 マニング。1908年5月のモルトン村への写生旅行に南と同行した友人画家

(ふじさきあや／当館主任学芸員)



図1 「オンスロー画室」 母・道子宛・南薫造書簡 (1908年7月9日付)



図2 《スタジオにて》1908年 水彩・紙 当館蔵

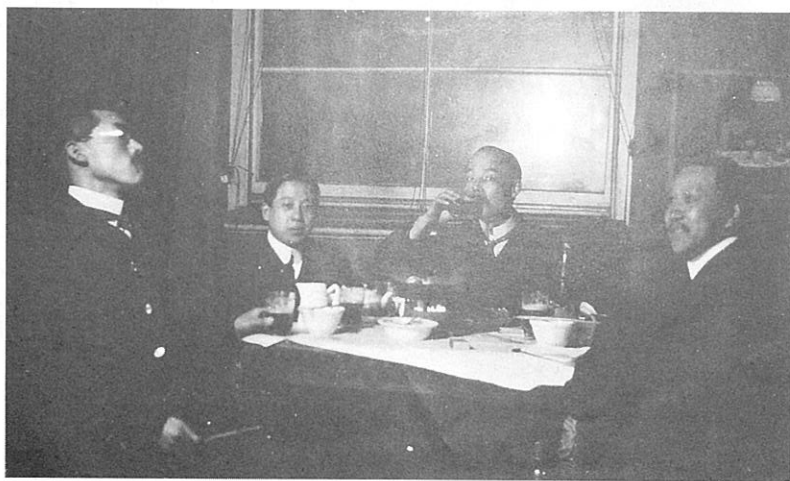


図3 1908年春頃か (左から) 高村光太郎、南薫造、白瀧幾之助、大澤三之助



図4 《うしろむき》1909年 水彩・紙 当館蔵

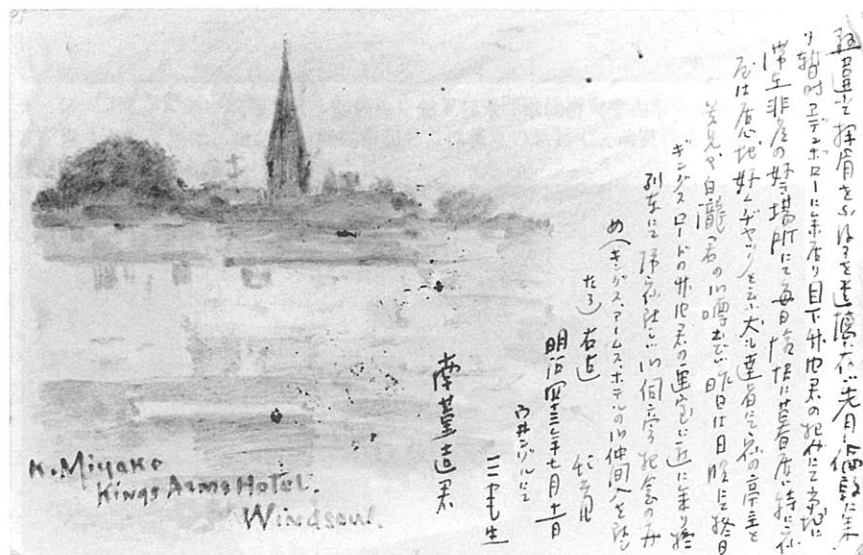


図5 ウィンザー滞在を記す南薫造宛・三宅克己書簡(1910年7月11日付)



図6 1909年5月1日頃「Grammar School セーキスピヤの学校」

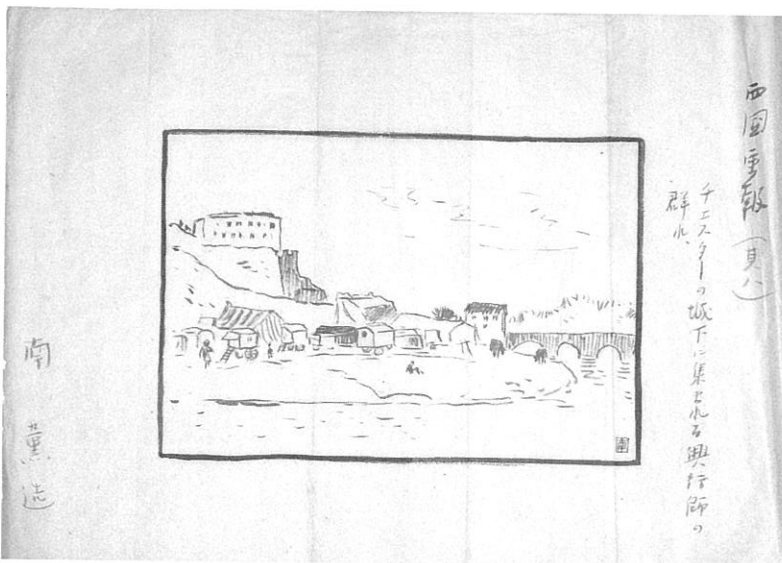


図7 「チェスターの城下に集まれる興行師の群れ」

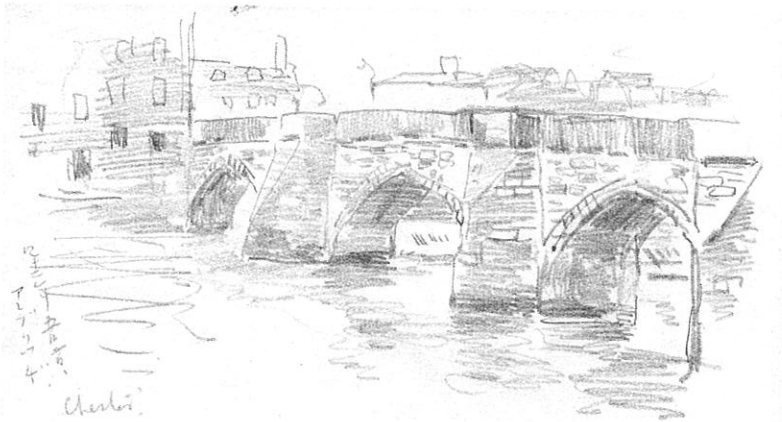


図8 「四十二年五月二日。アンブリッジ。Chester.」

広島県立美術館 研究紀要 第13号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.13

発行日 2010年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22

2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel. 082-221-6246 Fax. 082-223-1444

印刷 株式会社 タカトープ rint メディア

〒730-0052 広島市中区千田町3丁目2-30

Tel. 082-244-1110